

後 閑 団 地 遺 跡

住宅団地造成地区内発掘調査

1 9 8 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

近年、人口の増加・核家族化の傾向が進むにつれ、住宅入居希望者が増え、今や住宅不足は深刻な社会問題にもなっています。

前橋市でも、土地価格の上り、建築資材の高騰などの問題をかかえているにもかかわらず、住宅団地造成を実施してまいりました。本遺跡地に建設する住宅団地も、住宅団地造成事業計画のひとつであります。

ところで、市民の快適なくらしを願う住宅団地造成事業と埋蔵文化財保存の問題は、常にうらはらの関係にあり、前橋市教育委員会にあっては、文化財保護という立場から両者の調整に努力しているところであります。

ここに報告する後閑団地遺跡もそのひとつで、調査地全域について記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての堅穴式住居跡、石槨墓、井戸跡等の数多くの遺構や遺物が発見され、貴重な資料を得ることができました。ここにその成果の一端を報告いたします。

この調査を実施するにあたり、終始ご協力いただいた前橋市工業団地造成組合及び建築課の方々、また直接調査に携わっていただいたい作業員の方々に対して、厚くお礼を申し上げ、感謝する次第であります。

最後に、本調査報告書が一人でも多くの方々に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

昭和58年3月31日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

團長 佐藤寅雄

本文目次

序文

本文目次 付表目次 例言 凡例

I 遺跡の位置と環境	1
II 発掘調査の概要	3
1 調査の経過	3
2 調査の方法	3
3 地層	4
4 検出遺構	4
5 遺構と遺物	7
(1) 住居跡	7
(2) 石櫛墓	20
(3) 井戸跡	21
(4) 溝跡	22
(5) 落ち込み	25
(6) 土壌	26
(7) グリッド・表採遺物	26
III まとめ	27

付表目次

第1表 検出遺構一覧表	4
第2表 1号住居土器観察表	7
第3表 2号住居土器観察表	8
第4表 3号住居土器観察表	9
第5表 4号住居土器観察表	10
第6表 5号住居土器観察表	11
第7表 9号住居土器観察表	13
第8表 10号住居土器観察表	14
第9表 13号住居土器観察表	16
第10表 14号住居土器観察表	17
第11表 15号住居土器観察表	18・19
第12表 16号住居土器観察表	19
第13表 住居一覧表	20
第14表 石櫛墓土器観察表	20

第15表 溝一覧表	22
第16表 1号溝土器観察表	23
第17表 4、5、6号溝土器観察表	24
第18表 落ち込み一覧表	26

例　　言

1. 本報告書は、前橋市後閑町に所在する後閑団地遺跡の昭和57年度発掘調査の概要である。
2. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
3. 発掘調査の要項

調査期間 昭和57年9月17日～昭和57年11月30日

調査場所 前橋市後閑町1番1外8筆

発掘担当者 林喜久夫、井野修二、前原 豊

調査面積 2577m²

4. 本書の執筆は林喜久夫が行い、遺物の実測、製図、及び写真撮影等は、調査担当者及び主に加部二生、武井美枝子、高島あや子、宮澤則子が分担して行った。
5. 本発掘調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会で整理、保管している。
6. 本発掘調査にあたっては、前橋市工業団地造成組合、市役所建築課の人々をはじめ、たくさんの方々の御協力をいただいた。
7. 発掘調査に参加した方々は、次の通りである。（順不同）

武井美枝子、闇根さち子、木島茂男、後藤照子、須田良子、立川志保子、遠藤キヌ江
織間芳雄、闇根辰雄、出澤トシ子、石川タカヨ、天田玄市、川和昌子、奈良美知子

凡　　例

1. 各遺構の略号は次の通りである。

H…住居跡 W…溝跡 I…井戸跡 D…土壤 O…落ち込み

2. 採図の縮尺は下記の通りである。

・後閑団地遺跡の位置と周辺遺跡	$\frac{1}{6000}$	・1号溝実測図	$\frac{1}{200}$
・調査区周辺地形図	$\frac{1}{5000}$	・4、5、6号溝実測図	$\frac{1}{200}$
・遺構全体図	$\frac{1}{400}$	・出土遺物実測図	$\frac{1}{4}$
・住居実測図	$\frac{1}{60}$	・1～5号落ち込み実測図	$\frac{1}{60}$
・住居かまど実測図	$\frac{1}{60}$	・土壤実測図	$\frac{1}{40}$

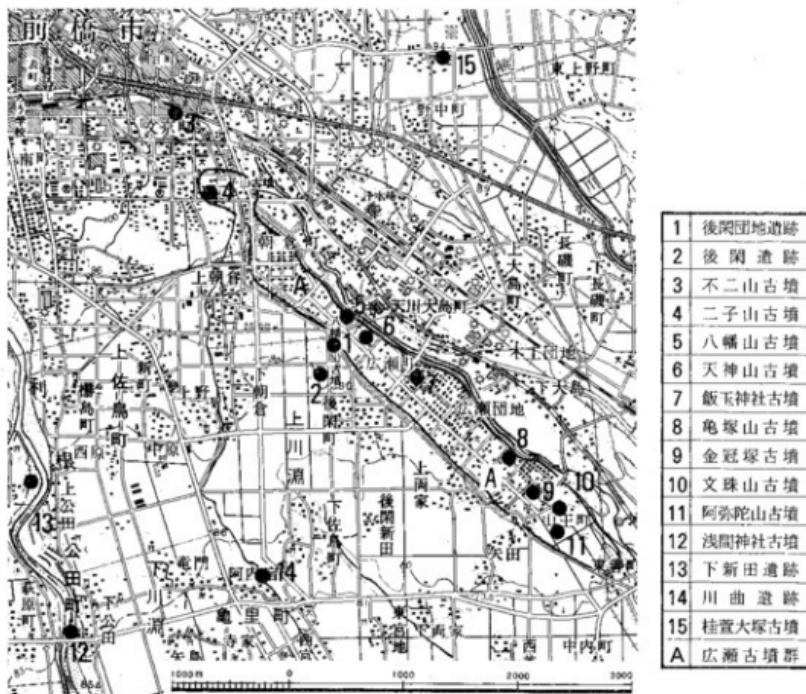
3. 採図の方向は、上方が北になるよう努めたが、図幅の関係でならないものもある。
4. 遺構採図中、平面図におけるスクリーン・トーンは焼土帯を表わしている。
5. 一覧表内の（推）は、推定の略字である。

I 遺跡の位置と環境

本遺跡は、市街地より南東へ約2kmの距離にある。東側に広瀬川が流れ、遺跡はその右岸に沿った微高地上に位置している。遺跡地の地目は桑地及び畠地である。西側には藤川、端氣川が流れしており、周辺は水田地帯である。標高は90m40cm内外である。

遺跡地周辺の歴史的環境をみると、旧上川測村に（上毛古墳綜覧による）113基の古墳群の存在が確認されていた。しかし昭和初期の強制開墾、戦中、戦後の開墾、そして昭和30年以降は開発の波が一気に押しよせ、大部分の古墳が未調査のまま破壊されている。現存している古墳は、八幡山、天神山、亀塚山、金冠塚、文珠山、阿弥陀山等の数基だけになっている。これらの古墳群は、4世紀前半から7世紀後半にいたるまでの全期間を通じて、築造がなされている。天神山古墳は本古墳群の中でも最大の規模を有する。出土品も鏡5個、大刀、紡錘車等15品目165点に及んだ。また南西側の水田地帯には、古代国家条里制地割の跡も認められる。これらのことから、本遺跡地周辺には、早い時期から豊かな古墳文化が存在していたことをうかがい知ることができる。

以上のことから、本遺跡地付近は、古代東国の歴史を知るうえで注目すべき地域と考えられる。



第1図 後閑団地遺跡の位置と周辺遺跡 (1/50,000)



第2図 調査区周辺地形図 (1 / 5000)

II 発掘調査の概要

1. 調査の経過

昭和57年8月14日付で前橋市工業団地造成組合より、後閑町団地造成事業用地表面調査についての依頼がくる。8月17日に表面調査を実施した結果、本調査地は、古墳時代～奈良・平安時代の遺跡地である可能性が極めて高いことがわかった。そのため、8月27・28日にかけ遺跡確認調査を行った。調査地区に対して、南北方向に10m間隔に幅2mのトレーニング6本を設定し、試掘を行った。その結果、竪穴式住居跡、石組造構、溝状造構等を確認することができた。そこで、前橋市工業団地造成組合より9月17日付で委託をうけ、発掘調査を実施することになった。

発掘の調査期間は、昭和57年9月21日～11月30日までの71日間にわたった。しかしながら、作業中止の日を除くと、実質の調査期間は54.5日であった。9月21日以降の調査経過の概要については、下記のとおりである。

—作業日誌より—

9. 21	発掘調査開始	28	B区グリッド設定 B区住居排土開始
	重機搬入 A区・B区表土はぎ開始	11	5 城南小学校歴史クラブの児童見学
24	A区住居排土開始	8	B区遺構全体写真撮影 B区終了
28	建築課、工事担当業者、文化財保護 係による現場における協議	9	重機搬入 C区表土はぎ開始
10. 6	A区グリッド設定	10	C区 グリッド設定 C区住居排土開始
8	水道設備の取付け	18	遺物洗浄、注記開始
14	A区全体遺構実測開始	19	C区全体遺構実測開始
15	春日中学校歴史クラブの生徒見学	20	C区遺構全体写真撮影 C区終了
22	A区遺構全体写真撮影 A区終了	22	遺物の接合開始
26	A区工事着工に伴う埋め戻し	27	発掘調査終了
		28	写真、図面の整理開始

2. 調査の方法

発掘調査は、事前の表面調査及び遺跡確認調査により、遺構、遺物が濃密に散布する全範囲とした。ところで、前橋市工業団地造成組合では、4階建ての住宅団地1棟を昭和58年3月31日までに完成させる緊急の事業計画があったことと、調査地は排土した土が用地予定以外に出せないために、調査にあたっては、調査区をA、B、Cの3区に分け、A区から順に発掘を実施した。

発掘調査はグリッド方式とした。4mグリッドを基本単位とし、東西を1、2、3…と数字、南北をA、B、C…とアルファベットで呼称。遺構調査では、①プラン確認 ②セクションベルトの設置 ③ネットによる実測 ④写真撮影等の順序で調査を実施した。

3. 地層

発掘調査地の層位を図示すると、右図の通りである。遺構及び遺物との関連をみると、土師器・須恵器を使用する竪穴式住居跡の確認面は、Ⅲ層上面である。

第Ⅰ層 耕作土層。新旧に別れており、新耕作土層は約20cm、旧耕作土層は約16cmの厚みをもっている。耕作土内には植物の腐食物を多量に含む。B軽石も少量散在する。

第Ⅱ-1層 灰褐色土層。約7cm前後の厚さである。株名山二ツ岳の軽石であるFP、FAをみる。攪乱をうけていないところでは、FAの純層が約2~3cmの厚さでみられる。

第Ⅱ-2層 黒褐色土層。ローム粒子が混入し、褐色を呈す。吸湿性、粘性があり、約6~12cmの厚さをもつ。少量のC軽石を含む。

第Ⅲ層 黄褐色土層。ロームを含み、しまりがある。厚さ約20cmである。所々に鉄分の凝縮した赤茶褐色土粒を含む。

第Ⅳ層 砂礫層。直徑が約0.1~1mm前後の粒で、18枚前後の層がみられる。上部は50cm程グレーの土色。下部50cmまでは酸化鉄色を呈し、比較的の粒子は粗い。最下部には、やや黒っぽい肌色のシルト層が発達している。



第3図 層序模式図

4. 検出遺構

本年度の発掘調査の結果、検出した遺構は古墳時代から奈良・平安時代に及び、竪穴式住居跡7、井戸跡1、石櫛墓1、土壙1、溝跡10、その他として落ち込み17を含めると、総遺構数47であった。検出遺構の時期をみると下記の通りであると思われる。

<古墳時代> 竪穴式住居跡……4世紀中期～後期(石田川期)石櫛墓……7世紀後期～8世紀後期
土壙……4世紀中期 溝跡……4世紀前期～7世紀後期 落ち込み……5世紀
<奈良・平安時代> 竪穴式住居跡……8世紀後期～9世紀前期(国分期)井戸跡……8世紀後期～9世紀前期 溝跡……8世紀前期～12世紀前期

なお、各遺構ごとの数を時代別に分類すると下表のようになる。

第1表 検出遺構一覧表

時代 \ 遺構	竪穴式住居跡	井戸跡	石櫛墓	土 壙	溝 跡	落ち込み	総 数
古 墳 時 代	5	0	1	1	5	17	29
奈良・平安時代	12	1	0	0	5	0	18
合 計	17	1	1	1	10	17	47

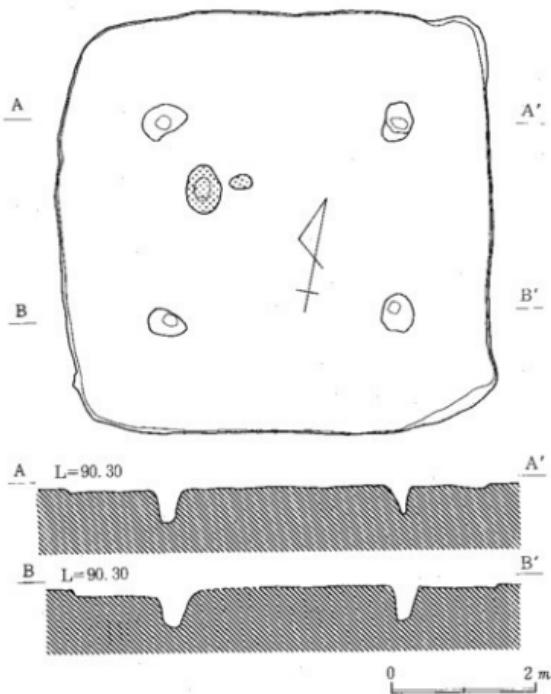


第4図 造構全体図 (1/400)

5. 遺構と遺物

(1) 住居跡

④ 1号住居

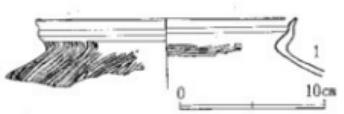


第5図 1号住居実測図

である。

炉 西寄りに、厚さ6cmで、68cm×48cmの広がりを有する焼土帯と炉の構築材である炉石が検出された。

遺物 壺のS字状口縁部が炉跡西寄りから出土した。

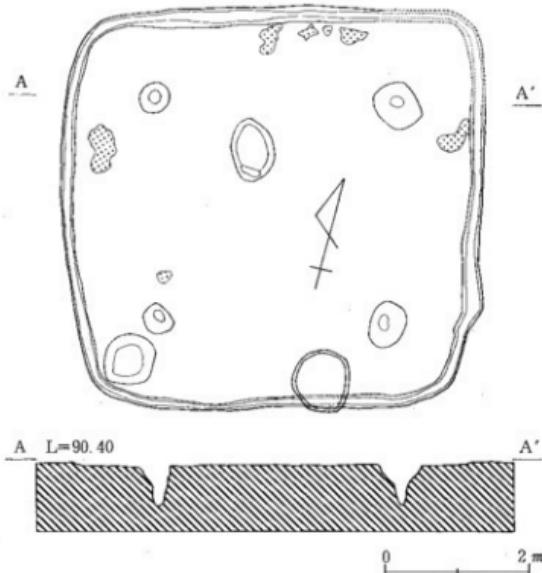


第6図 1号住居出土遺物

第2表 1号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
標図版 図版 1	土器 壺	口径 17.5 残高 5.0	口縁部 横ナデ、頸部・体部 ナメハケ、体内部 ナデ	輝石含有	色調 茶色を帯びた淡褐色、焼成 良好

⑤ 2号住居



第7図 2号住居実測図



第8図 2号住居出土遺物

りに多量の焼土帯の分布をみる。火災の跡か、単なる流れ込みなのか明らかでない。

柱穴 4個検出する。規模は口径40~50cmで、深さ35~50cmである。

炉 中央部やや北寄りで、広さ58cm×61cm、深さ8cmの規模である。焼土の厚さは約4cmである。

他の遺構 北東隅で1号溝、3号住居と重複する。先後関係は古い順に2号住居、1号溝、3号住居である。この外に、南端では土壤と重複しており、年代的には土壤の方が新しい。

第3表 2号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
絵図 図版 2	土器 壺	口径 18.0 残高 4.9	口縁部 横ナデ、頸部・体部 ナ ナメハケ、体内部 ナデ	石英・長石含有	茶色を帯びた淡褐色、焼成 良好
絵図 図版 3	土器 壺	口径 13.9 残高 4.3	折返し口縁、口縁部に棒状沈線2本を四ヶ所に施す、頸部 ナナメハケ	小礫・砂・石英・雲母含有	色調 淡褐色

位置 A区北寄り。

平面形、規模 長辺5.8m、短辺5.5mで、隅丸長方形を呈する。辺の中央部がやや膨らむ傾向を示す。長軸方向はN-63°-Eである。

周壁 黒色土中に作られている上に、後世の削平が床面近くまで達しているため、確認できなかった。

周溝 北東部の一部が1号溝と3号住居により埋されているが、それ以外の所では幅16~24cm、深さ5~11cm前後で明瞭に検出できた。

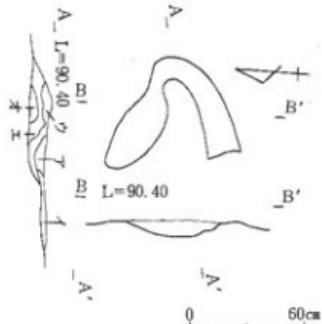
床面 2~5cmの高低差があるが、ほぼ平坦な床である。床面全体が黒褐色土により固められており、5~14cmの貼り床となっている。住居北寄

◎ 3号住居



1: 黄褐色土層(軽石含む)

第9図 3号住居実測図



ア: 黄褐色土層(礁土、灰、炭化物含む)
 イ: 黒色土層(白色粘土ブロック、礁土粒含む)
 ウ: 極褐色土層
 エ: 黄褐色土層(灰、礁土含む)
 オ: 黄褐色土層(礁土含む)

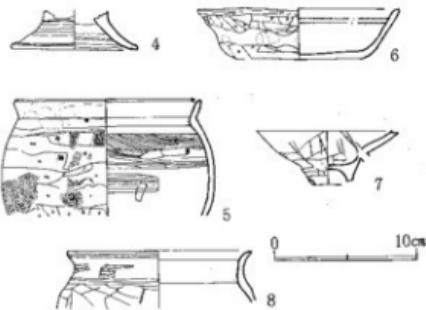
第10図 3号住居カマド実測図

平面形、規模 長辺 3.6 m、短辺 2.4 m を測り、偶丸長方形を呈する。長軸方向は N-63°-E を示す。

周壁 後世の削平により、2 cm 前後の壁高を、西壁、南壁に部分的に検出したにすぎない。

床面 4 ~ 5 cm の高低差があるが、ほぼ平坦である。堅綴面が住居の中心に直径約 2.4 m 程の円形に広がっている。貼床は 7 ~ 10 cm の厚さで、褐色土を施している。

かまど 東壁南寄りに位置し、壁外袖無し。構築材は白色粘土を使用している。

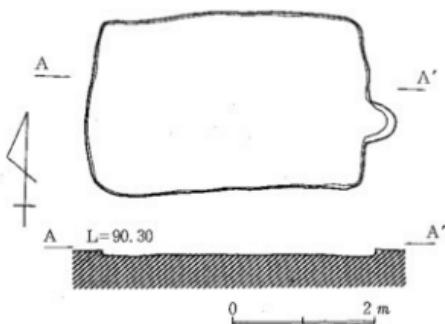


第11図 3号住居出土遺物

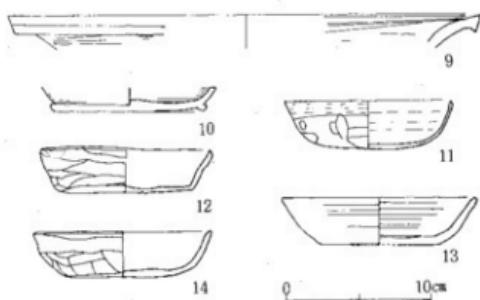
第4表 3号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
補図 図版 4	土師器 台付 楕	底径 7.7 残高 2.7	底部 回転ヘラ削り	石英・長石・ 輝石・金雲母 含有	色調 茶褐色、焼成 良好
補図 図版 5	土師器 壺	口径 12.9 残高 7.9	口縁部 横ナデ、一部指圧痕残る、 体部 ヘラ削り	輝石・石英・輝 石・長石含有	色調 茶褐色、焼成 良好
補図 図版 6	土師器 环	口径 14.0 低径 8.6 器高 3.2	口縁部及び体内部 横ナデ、体部 指圧痕形、底部 ヘラ削り	石英・輝石・ 長石・金雲母 含有	色調 茶褐色、焼成 良好
補図 図版 7	土師器 台付 楕	底径 3.8 器高 3.7	体部及び体内部 ナデ、底部 横ナデ	輝石・石英・ 長石・金雲母 含有	色調 茶褐色、焼成 良好
補図 図版 8	土師器 壺	口径 12.0 残高 4.0	口縁部 横ナデ、体部 ヘラ削り	石英・長石・ 輝石・雲母含 有	色調 茶褐色、焼成 良好

④ 4号住居



第12図 4号住居実測図



第13図 4号住居出土遺物

第5表 4号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
捕図 図版 9	須恵器 大 盤	口径 32.4 残高 2.3	回転ヘラ削り、体内部 ナデ	輝石・雲母・ 石英・礫含有	色調 灰色、焼成 良好
捕図 図版 10	須恵器 环	底径 9.9 残高 1.8	体部及び体内部 回転クロロ、ヘラ削り、底部 回転ヘラ切り	砂・雲母・輝石・ 石英・礫含有	色調 白灰色、焼成 良好
捕図 図版 11	土師器 环	口径 12.5 底径 5.0 器高 3.8	口縁部 横ナデ、体部 指圧整形、 底部 ヘラ削り	多量の礫含有	色調 茶褐色、焼成 良好
捕図 図版 12	土師器 环	口径 11.8 底径 9.4 器高 3.1	口縁部 横ナデ、体部 横ナデ、 一部指圧整形、底部 ヘラ削り	長石・石英・ 輝石・小石含有	色調 茶褐色、焼成 良好
捕図 図版 13	須恵器 环	口径 13.5 底径 7.9 器高 3.8	体部 回転ヘラ削り、底部 回転 糸切り	輝石・長石・砂 含有	色調 青灰色、焼成 良好
捕図 図版 14	土師器 环	口径 12.2 底径 7.5 器高 3.1	口縁部 横ナデ、体部 横ナデ、 指圧整形、底部 ヘラ削り、体内 ナデ	砂・礫含有	色調 茶褐色、焼成 良好

位置 B区北寄りで、黄褐色土層が一段高くなる所に位置している。

平面形、規模 長辺 3.9m、短辺 2.4mを測り、長方形を呈する。長軸方向は N-75°-E である。

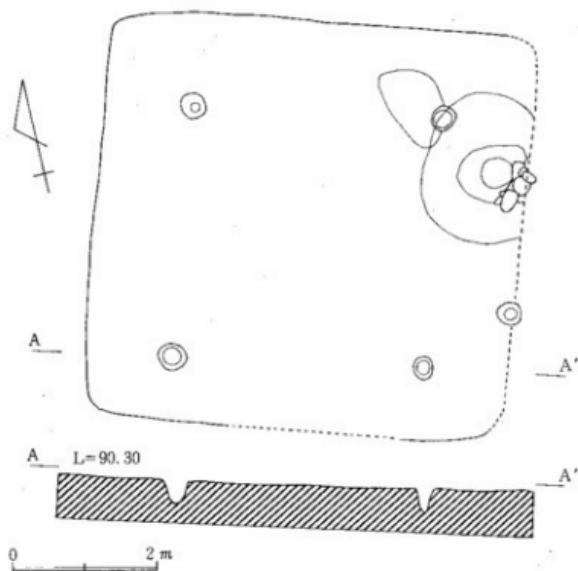
周壁 残存状態は比較的良好な方で、黄褐色土層を掘り込んだ状態で壁高 7~10cmを測る。

床面 プラン確認面下約10cmの所で検出された。粘土を用いた固い貼り床で、厚さが 5~6cm である。

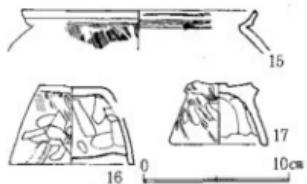
かまど 東壁やや南寄りに付設。壁外で袖無し。平面形は、焚口幅約48cm、奥壁中央部幅約44cm、奥行約48cm程の半円形状を呈する。火床部は、8cm程の高さを残すのみである。燃焼部覆土中には、焼土ブロック、炭化物を多量に含む。

遺物 住居全面に土器の小破片が多量に散布していた。坏の完形が、かまど南寄りと住居中央部に2個体検出された。

◎ 5号住居



第14図 5号住居実測図



第15図 5号住居出土遺物

位置 B区中央に位置し、西側はほとんど削平された状態で検出された。周溝及び炉跡は確認できなかった。

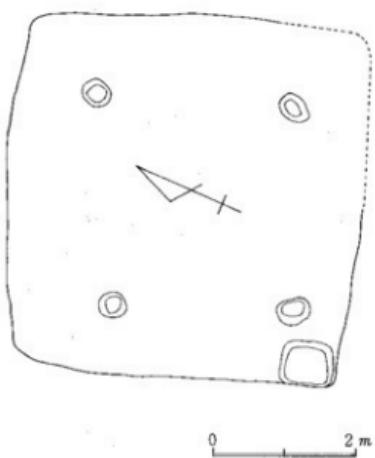
床面 黒色土を4~5cm程貼っている。一方、北東に位置する柱穴付近には、ロームブロック使用の貼床が認められた。

他の遺構 東壁北寄りの所で石櫛基と重複。時期的には石櫛基の方が新しく、5号住居の床面を振り抜いている。

第6表 5号住居 土器観察表

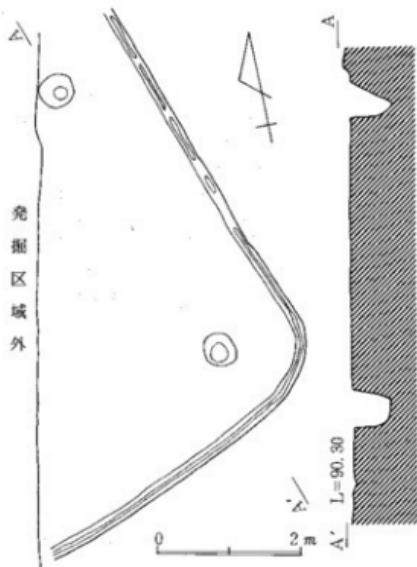
遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
補圖 図版 15	土器 甕	口径 16.2 残高 2.8	口縁部 横ナデ、頸部・体部 ナ ナメハケ、体内部 ナデ	雲母・輝石・ 石英・砂含有	色調 暗褐色、焼成 良好
補圖 図版 16	土器 甕付甌	口径 8.6 残高 5.6	脚部 外面ナデ、一部 ナナメハ ケ、体内部 ナデ	砂・繊含有	色調 淡褐色、焼成 良好
補圖 図版 17	土器 甕付甌	底径 6.7 残高 4.2	脚部 外面ナデ、一部 ナナメハ ケ、体内部 ナデ	砂・輝石・良 石含有	色調 淡褐色、焼成 良好

(f) 6号住居



第16図 6号住居実測図

(g) 7号住居



第17図 7号住居実測図

位置 B区北部に位置している。黄褐色土層の南傾斜途上にある。

平面形、規模 石田川期の住居としては、やや規模の小さい一辺を5mとする隅丸方形である。方位はN-49°-Eを示す。

周壁 削平がひどく、南東隅にわずか2cm程壁高を認める。

柱穴 口径約40cm、深さ約40cmの形のよい柱穴を4個検出。

他の遺構 北東コーナーで4号住居と重複し、切られる。

遺物 遺物の量は少なく、土器片が5個出土したのみである。

位置 B区の北寄りに位置し、遺構の半分以上が調査区域外である。

平面形、規模 南辺、東辺の一部しか検出できなかったが、東辺寄りの2個の柱穴の間隔から規模を推定すると、1辺が7mを越える大規模な隅丸方形住居ではないかと思われる。

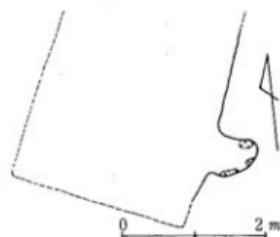
周溝 東辺南寄りから南辺にかけて、幅約17cm、深さ約6cm程で明瞭に検出できた。黄褐色土層を掘り込んで作っており、溝は全周したのではないかと思われる。

床面 C軽石、ロームブロック混入の褐色土層で貼床を施している。おうとつの少ない平坦な面で、あまり固い床面ではない。

柱穴 口径約46cm、深さ約50cmの柱穴が、2個検出された。覆土中には、C軽石、ロームブロックが多量に含まれていた。

他の遺構 南壁の部分で11号住居と重複している。先後関係は11号住居の方が新しい。

⑤ 8号住居



第18図 8号住居実測図

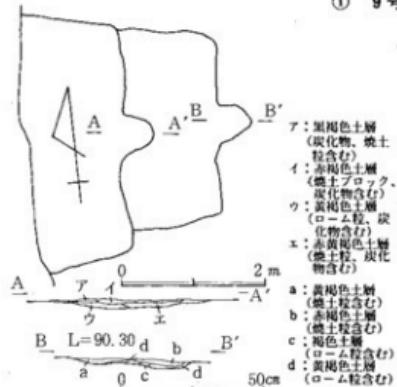
位置 A区南西寄りで、黄褐色土層が東部よりわずかではあるが傾斜している所に位置している。

平面形、規模 遺物の出土範囲、貼り床の状態等から推測すると、長辺2.6m、短辺2.2mの長方形を呈するものと思われる。方位はN-63°-Wを示している。

床面 2~4cmの高低差はあるが、ほぼ平坦である。褐色土で3cm程貼り床を施す。床面はあまり硬質ではない。

他の遺構 4号落ち込みの上に、本遺構は構築されている。

⑥ 9号住居



第19図 9・10号住居実測図

ア: 黄褐色土層
(炭化物、焼土
含有)

イ: 褐色土層
(焼土ブロック、
炭化物含む)

ウ: 美褐色土層
(ローム粒、炭
化物含む)

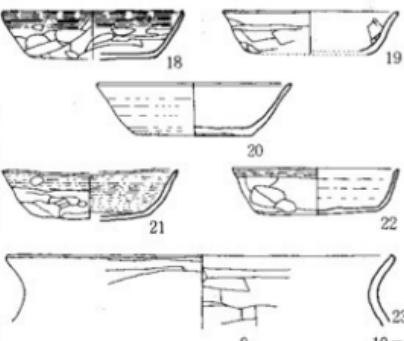
エ: 赤褐色土層
(焼土粒、炭化
物含む)

オ: 黄褐色土層
(焼土粒含む)

カ: 褐色土層
(焼土粒含む)

メ: 褐色土層
(ローム粒含む)

ソ: 黄褐色土層
(ローム粒含む)



第20図 9号住居出土遺物

位置 B区北西の隅に位置している。遺構の半分以上が調査区域外である。

平面形、規模 東西の辺は不明だが、南北の辺が3.2mを測り、長方形の国分期住居と考えられる。長軸方向はN-89°-Eを示す。

床面 褐色土を使用し、2~3cmの厚さで貼り床を施している。ほぼ平坦な床面で、あまり硬質ではない。

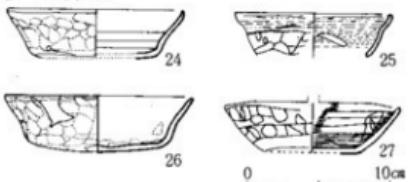
かまど 東壁中央部に位置し、壁外で袖無しである。火床面近くまで後世の削平が達しており、残存状態はよくない。燃焼部中央は住居床面よりわずかに低く、舟底状を呈している。覆土には、焼土ブロック、炭化物を多量に含んでいる。

第7表 9号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
插図 図版 18	土器 环	口径 12.4 底径 5.0 器高 3.1	口縁部及び体内部 横ナデ、体部 指圧整形、底部 ヘラ削り後、ヘ ラ調整	礫・砂・石英 含有	色調 茶褐色、焼成 良好
插図 図版 19	土器 环	口径 12.2 底径 8.8 器高 2.9	口縁部及び体内部 横ナデ、体部 指圧とヘラ削り整形、底部 ヘラ 削り	石英・輝石・ 長石・酸化鉄 含有	色調 褐色、焼成 良好

捕図 図版	20	須惠器 环	口径 13.6 底径 8.0 器高 3.6	口縁部・体部 回転ヘラ削り整形、底部 回転糸切り	石英・酸化鉄含有	色調 青味がかった灰色、焼成 良好
捕図 図版	21	土師器 环	口径 12.2 底径 8.0 器高 3.5	口縁部から体内部 横ナデ、体部 ヘラ削り、一部 指圧整形、底部 ヘラ削り	砂・石英・塵含有	色調 茶褐色、焼成 良好
捕図 図版	22	土師器 环	口径 12.4 底径 7.6 器高 3.4	口縁部から体内部 横ナデ、体内部 ヘラみがき、体部及び底部 ヘラ削り	多量の塵含有	色調 茶色、焼成 良好
捕図 図版	23	土師器 甕	口径 27.2 底径 4.9	口縁部 横ナデ、体部 ヘラ削り、体内部 ヘラ削り	石英・輝石含有	色調 茶褐色、焼成 良好

① 10号住居

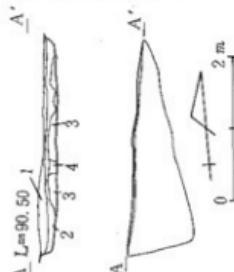


第21図 10号住居出土遺物

かまど 東壁中央部に位置し、壁外で袖無しである。燃焼部中央は床面より 8 cm 程低く、覆土中には、ローム粒、焼土、炭化物が確認された。

第8表 10号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
捕図 図版	土師器 环	口径 12.2 底径 8.4 器高 3.3	口縁部 横ナデ、体部 ヘラ削り、体内部 ナデ	輝石・長石・ 石英・塵含有	色調 褐色、焼成 良好
捕図 図版	土師器 环	口径 11.0 底径 3.0	口縁部から体内部にかけて横ナデ、一部指圧調整、体部から底部にかけてヘラ削り、指圧痕	多量の塵含有	色調 茶褐色、焼成 良好
捕図 図版	土師器 环	口径 13.0 底径 9.6 器高 3.8	口縁部及び体内部 横ナデ、底部 ヘラ削り、体部 ヘラ削り後指圧整形	石英・輝石・ 雲母・砂含有	色調 淡褐色、焼成 良好
捕図 図版	土師器 环	口径 12.2 底径 6.8 器高 3.4	口縁部 横ナデ、体部 ヘラ削り、一部指圧整形、底部 ヘラ削り	多量の石英・ 輝石含有	色調 褐色、焼成 良好



1: 黒褐色土層 (Eroded surface)
2: 黒褐色土層 (Ceramic layer, loam block containing)
3: ローム層 (Loam layer)
4: 喰褐色土層 (Ceramic layer, loam block containing)

第22図 11号住居実測図

位置 B区北西の隅に位置し、遺構の一部が調査区域外にある。

平面形、規模 東西の辺は不明だが、南北の辺が 2.2 m を測る。形状は長方形と思われる。長軸方向は N-80°-E を示す。

床面 2 ~ 3 cm 前後の厚さで貼り床が認められた。褐色土を施し、しまりに欠ける。

② 11号住居

位置 B区北西に位置する。遺構の大部分が調査区域外である。

平面形、規模 形状は長方形と思われる。規模については計測不能である。方位は N-59°-E を示す。

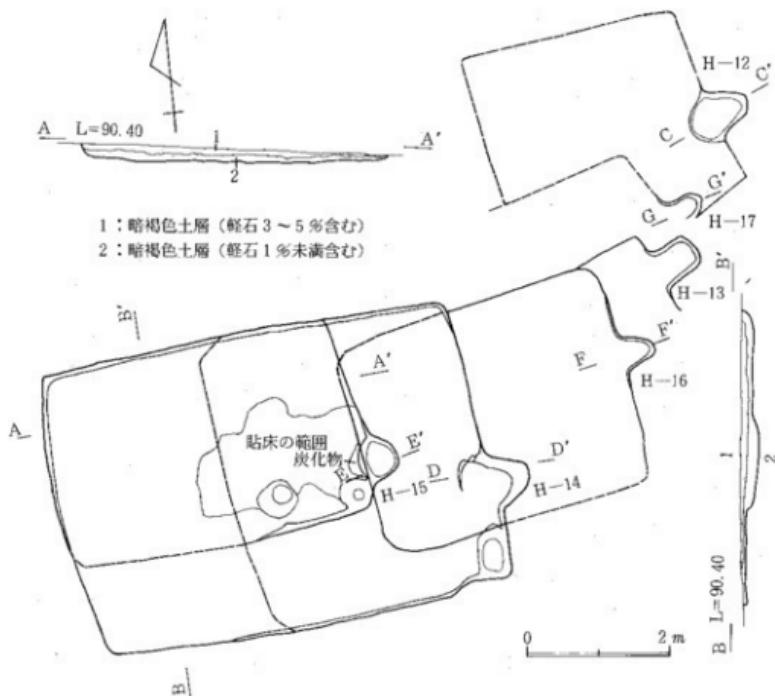
周壁 後世の削平が床面近くまで達し、確認できなかった。

床面 褐色土を施した貼り床で、おうとつが少なく平坦である。

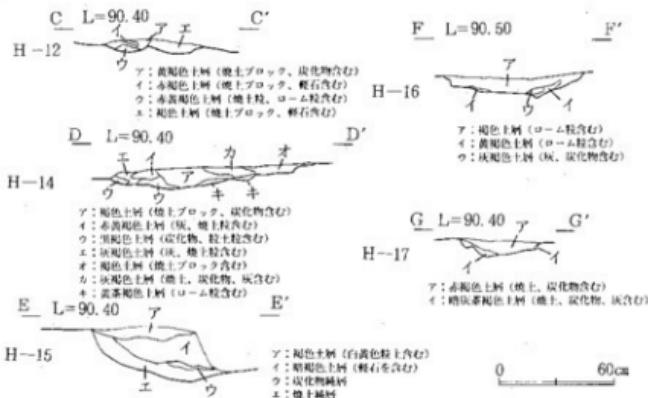
他の遺構 7号住居と重複している。年代は7号住居より新しい。

遺物 床面直上から出土。土師器の小破片を数点検出した。

① 12号住居



第23図 12~17号住居実測図



第24図 12・14~17号住居カマド実測図

位置 C区南東寄りに位置する。17号住居と南壁の部分で重複する。

平面形、規模 後世の削平のため形状が不明瞭であるが、遺物の出土範囲、貼り床の状態等から、長辺 3.2m、短辺 2.8m の長方形を呈すると考えられる。長軸方向は N-64°-E を示す。

かまど 東壁に付設され、壁外で袖無しである。火床は床面とし、燃焼部中央は住居面よりもわずかに低く、舟底状を呈している。覆土中には多量の炭化物、焼土が確認された。

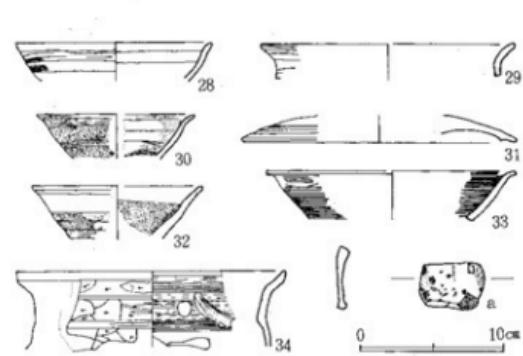
㊱ 13号住居

位置 C区南東に位置し、16号住居、17号住居と重複する。

平面形、規模 16号住居に住居西側の大部分を切られているため不明瞭であるが、形状は北壁と東壁の残存状態から長方形と思われる。長軸方向は N-60°-E を示す。規模は計測不能である。

床面 多量のロームブロックと直径 5mm 前後の炭化物を混入する茶褐色土を使用し、貼り床を施している。厚さは 8~10cm で、非常にしまりのある固い床である。

かまど 東壁に付設する。壁外で袖無しである。後世の削平のために残存状態はよくないが、平面形は焚口幅約 24cm、奥壁幅約 20cm、奥行約 70cm である。燃焼部中央は床面よりも約 8cm 低くなっている。覆土中には、C 軽石、多量の焼土、褐色の粘質土等が含まれていた。



他の遺構 本住居と 16号住居、17号住居の先後関係は、古い順に 17号住居、13号住居、16号住居である。

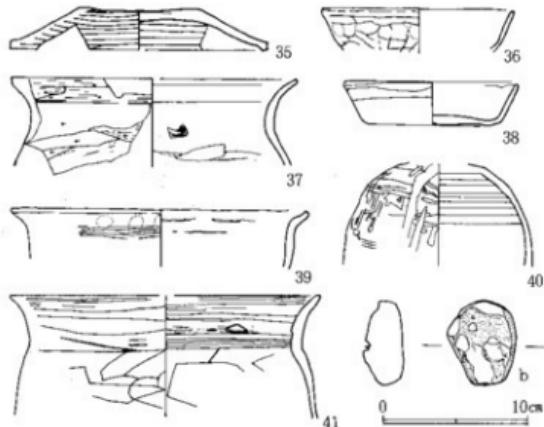
遺物 かまど内に集中して土器片が検出された。検出された土器片には、土師質の壺、甕、須恵質の蓋、壺等がみられた。その他に鉄製品も検出されたが、名称、用途等については不明である。

第25図 13号住居出土遺物

第9表 13号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
28 図版	土師器 壺	口径 13.6 残高 2.7	口縁部・体部 横ナデ後研磨、体 内部 ナデ	輝石・石英・ 雲母・隕含有	色調 焼成 淡褐色 良好
29 図版	土師器 甕	口径 17.6 残高 2.5	口縁部 横ナデ、体内部 ナデ	輝石・石英・ 長石・隕含有	色調 焼成 暗褐色 良好
30 図版	須恵器 壺	口径 10.8 残高 3.0	口縁部・体部 横ナデ、体内部 ナデ、二次焼成	輝石・砂含有	色調 焼成 褐色 良好
31 図版	須恵器 蓋	口径 19.0 残高 1.8	天井部 回転ヘラ削り、据部 ヘ ラナデ	長石・酸化鉄 含有	色調 焼成 灰色 良好
32 図版	須恵器 壺	口径 11.7 残高 3.7	口縁部・体部 回転ヘラ削り	輝石・砂含有	色調 焼成 褐色 良好

捕図 図版	33	須 惠 器 壺	口径 18.6 残高 3.3	体部・体内部 回転ヘラ削り	石英・輝石・ 砂・礫含有	色調 焼成 灰色 良好
捕図 図版	34	土 師 器 壺	口径 18.6 残高 5.2	口縁部 回転ヘラ削り、体部 ヘラ削り、体内部 ナデ	輝・砂含有	色調 焼成 茶褐色 良好



第26図 14号住居出土遺物

④ 14号住居

位置 C区南端に位置し、15号住居、16号住居と重複する。

平面形、規模 東西の辺の長さがやや不明瞭であるが、南北の辺は4.1mを測り、隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-68°-Eを示す。

かまど 東壁南寄りに付設、壁外で袖無し。燃焼部中央は床面より低い。

床面 黒色土を用いて、貼り床を施している。

第10表 14号住居 土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
捕図 図版	35 須 惠 器 壺	口径 17.6 器高 2.7	天井部 回転ヘラ削り、据部 折り返し	小石・砂含有	色調 褐色、焼成 内部は、やや焼きが甘い
捕図 図版	36 土 師 器 壺	口径 13.2 残高 2.9	口縁部 橫ナデ、体部 ヘラ削り 指圧整形、体内部 ナデ	石英・輝石・ 含有	色調 茶褐色 焼成 良好
捕図 図版	37 土 師 壺	口径 19.6 残高 6.1	口縁部 橫ナデ、体部 ナナメヘラ削り、体内部 ナデ	砂・輝・長石 含有	色調 赤茶褐色 焼成 良好
捕図 図版	38 土 師 壺	口径 12.1 底径 9.0 器高 3.0	口縁部 橫ナデ、体部及び体内部 ナデ、一部指圧整形、底部 ヘラ削り	石英・輝石含 有	色調 褐色 焼成 良好
捕図 図版	39 土 師 壺	口径 20.6	口縁部 橫ナデ、体部 ナデ、一部指圧整形、体内部 ナデ	石英・輝石・ 小砾含有	色調 茶褐色 焼成 良好
捕図 図版	40 灰釉陶器 瓶	残高 7.1	体内外面 ロクロ回転、ナデ整形 (水びき)、施釉はツケがけ	緻密な胎土	色調 淡緑色 焼成 良好
捕図 図版	41 土 師 壺	口径 21.4 残高 8.4	口縁部 橫ナデ、頸部 ナナメヘラ削り、体部 ヘラ削り、体内部 ナデ	石英・輝石・ 雲母・砂含有	色調 褐色 焼成 良好

◎ 15号住居

位置 C区南端中央部に位置し、14号住居と重複する。

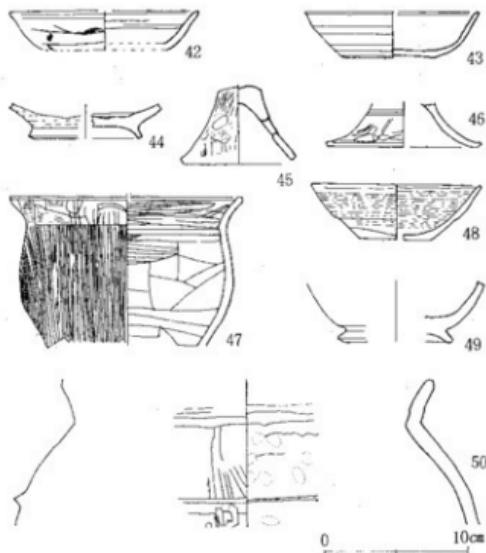
平面形、規模 長辺4.4m、短辺2.8mを測り、形状は長方形である。長軸方向はN-71°-Eを示す。

周壁 壁の残存状態は比較的良好で、黄褐色土層を掘り込んだ状態で壁高10~18cmを測る。しかし南西部は、後世の搅乱のため破壊され、壁高がわずか2~5cmしか残されていない。

床面 プラン確認面下約15cmの所で検出された。ロームブロックと黒色土の混土からなる褐色土を使用した貼り床が、カマド周辺のみに確認された。2~3cmの高低差はあるが、おうとつの少ない平坦な床面である。

柱穴 床面を入念に精査したが確認できなかった。

かまど 東壁南寄りに付設され、壁外で袖無しである。平面形は焚口幅約50cm、奥壁幅約26cm、



第27図 15号住居出土遺物

第11表 15号住居 上器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
捕図 図版 42	須恵器 環	口径 13.0 残高 2.6	口縁部・体部 回転ヘラ削り	石英・長石・ 隕含有	色調 焼成 灰色 良好
捕図 図版 43	須恵器 環	口径 12.2 底径 6.0 器高 3.2	口縁部・体部 回転ヘラ削り、底 部回転糸切り	隕・砂・輝石 含有	色調 焼成 青灰色 良好
捕図 図版 44	須恵器 碗	底径 7.6 残高 2.4	口縁部・体部 回転ヘラ削り、底 部回転糸切り後台貼付さらに、 ヘラ調整	砂粒・隕含有	色調 焼成 灰褐色 良好

奥行約40cmの半円形を呈する。火床は床面とし、燃焼部中央は住居床面より約6cm低い。覆土の上層には直径5mm程の白色粘土ブロックと軽石を、下層には炭化物、焼土、灰を多量に含んでいた。焚口には多量の炭化物が認められる一方、かまどの奥に安山岩の支脚も検出された。

貯藏穴 南東の隅に位置し、かまどに隣接する。規模は直径20cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。底部からは土師質の壺の完形品が出土した。覆土は暗褐色土で、炭化物、ロームブロックを含む。

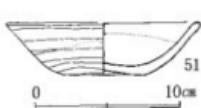
他の遺構 14号住居の北西部分で重複しているが、先後関係は本住居の方が後である。

拂図 図版	45	土 師 器 台	残高 5.5	脚部 ハケメ後ヘラ研磨、脚内部ナデ	輝石・長石・石英含有	色調 焼成	褐色 良好
拂図 図版	46	土 師 器 棚	底径 10.8 残高 3.0	体部及び体内部 橫ナデ、部分的に、指圧痕、ヘラ痕有り、上部ヘラによる沈線 2本	砂粒・輝石含有	色調 焼成	茶褐色 良好
拂図 図版	47	土 師 器 頂	口径 15.8 残高 10.2	口縁部 ヘラ削り、指圧整形、体部 ハケメ整形、体内部 ナデ	輝石・石英含有	色調 焼成	赤褐色 良好、二次焼成
拂図 図版	48	須 惠 器 破	口径 11.8 底径 3.6 器高 4.8	体部 回転ヘラ削り整形、底部 回転糸切り	砂・輝石含有	色調 焼成	灰色 良好
拂図 図版	49	土 師 器 台	底径 8.0 残高 4.3	体部 ヘラ削り、台貼付、接合面ヘラ調整、体内部 ナデ	多量の小砂・輝石含有	色調 焼成	茶色 良好
拂図 図版	50	須 惠 器 頂	口径 25.6 残高 10.0	口縁部 橫ナデ、体内外面 ナデ、施釉は、ツケガケ	小石を少量含有	色調 焼成	暗い緑色 良好

② 16号住居

位置 C区南端に位置し、13号住居、14号住居、17号住居と重複する。

平面形、規模 長辺 3.8m、短辺 3mを測り、やや隅の丸い長方形を呈する国分期の住居である。長軸方向はN-66°-Eを示す。



床面 ロームブロック、C軽石を混入する黒褐色土で貼り床を施している。平坦で、固さは認められない。

かまど 東壁やや北寄りの位置に付設し、壁外袖無しである。火床下に、灰原部を残すのみである。

第28図 16号住居出土遺物

第12表 16号住居 土 器 観 察 表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考	
拂図 図版	51	須 惠 器 破	口径 13.4 底径 5.6 器高 3.6	体部 ロクロ回転ナデ、底部 回転糸切り	輝石・雲母・ 石英含有	色調 口縁部乳白色 体部黒味がかった灰色 焼成 良好

③ 17号住居

位置 C区南東部に位置する。12号住居、13号住居、16号住居と重複する。

平面形、規模 遺物の出土範囲、貼り床の状態から、方形を呈するものと思われる。規模については計測不能である。長軸方向はN-58°-Eを示す。

床面 多量のロームブロックと黑色土の混土で貼り床を施し、非常にしまりがある。

かまど 上部が削平され、下部のみ高さ約8cmを残すのみであった。東壁に付設され、壁外袖無しである。平面形は焚口幅約60cm、奥壁中央部幅約40cm、奥行約80cmの半梢円形を呈する。火床は床面とし、燃焼部中央は住居床面よりもわずかに低く作られている。覆土中には焼土、炭化物が認められた。

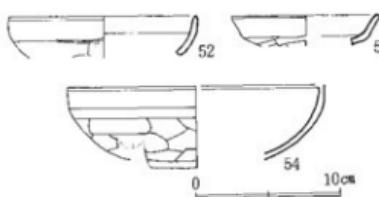
他の遺構 本住居を含めると4軒の住居が重複している。17号住居は12号住居を切り、逆に住居の南端を13、16号住居に切られている。先後関係は古い方から、12号住居、17号住居、13号住居、16号住居の順になる。4軒とも出土遺物、平面形等から、国分期の住居であると考えられる。

第13表 住居一覧表

番号	形 状	規 模 (m) (長軸)×(短軸)	長軸方向	カ マ ド	柱穴	貯藏穴	周溝	時 期	備 考
1	楕 丸 方 形	5.6 × 5.6	N-68°-E	なし 炉跡あり	あり 4	なし	なし	石田川期	炉跡に炉石を検出
2	楕 丸 長 方 形	5.8 × 5.5	N-63°-E	なし 炉跡あり	あり 4	あり 1	あり	石田川期	北寄りに多量の燒土帶の分布をみる 炉跡に炉石を検出
3	楕 丸 長 方 形	3.6 × 2.4	N-63°-E	あり 東壁南寄り	なし	あり 1	なし	国 分 期	貯藏穴、南東楕円形
4	長 方 形	3.9 × 2.4	N-75°-E	あり 東壁南寄り	なし	なし	なし	国 分 期	環の形跡 2個体出土
5	楕 丸 方 形	6.0 × 6.0 (推)	N-8°-E	なし	あり 4	なし	なし	石田川期	石礫基と重複
6	楕 丸 方 形	5.0 × 5.0	N-49°-E	なし	あり 4	あり 1	なし	石田川期	貯藏穴、南東楕円形
7	楕 丸 方 形	7.2 × 7.2 (推)	N-54°-E	なし	あり 2	なし	あり	石田川期	遺構の一部が調査区域外
8	長 方 形 (推)	2.6 × 2.2 (推)	N-63°-W	あり 東壁	なし	なし	なし	国 分 期	遺構の一部が調査区域外
9	長 方 形 (推)	不明 × 3.2	N-89°-E	あり 東壁中央	なし	なし	なし	国 分 期	遺構の一部が調査区域外
10	長 方 形 (推)	不明 × 2.2	N-86°-E	あり 東壁中央	なし	なし	なし	国 分 期	遺構の一部が調査区域外
11	長 方 形 (推)	不明	N-59°-E	なし	なし	なし	なし	国 分 期	遺構の一部が調査区域外
12	長 方 形 (推)	3.2 × 2.8 (推)	N-64°-E	あり 東壁	なし	なし	なし	国 分 期	
13	長 方 形 (推)	不明	N-60°-E	あり 東壁	なし	なし	なし	国 分 期	
14	楕 丸 長 方 形	4.1 × 3.5 (推)	N-08°-E	あり 東壁南寄り	なし	あり 1	なし	国 分 期	貯藏穴、南東楕円形
15	長 方 形 (推)	4.4 × 2.8	N-71°-E	あり 東壁南寄り	なし	あり 1	なし	国 分 期	貯藏穴、南東楕円形
16	楕 丸 方 形	3.8 × 3.0	N-66°-E	あり 東壁北寄り	なし	なし	なし	国 分 期	
17	方 形 (推)	不明	N-58°-E	あり 東壁	なし	なし	なし	国 分 期	

(2) 石櫛墓

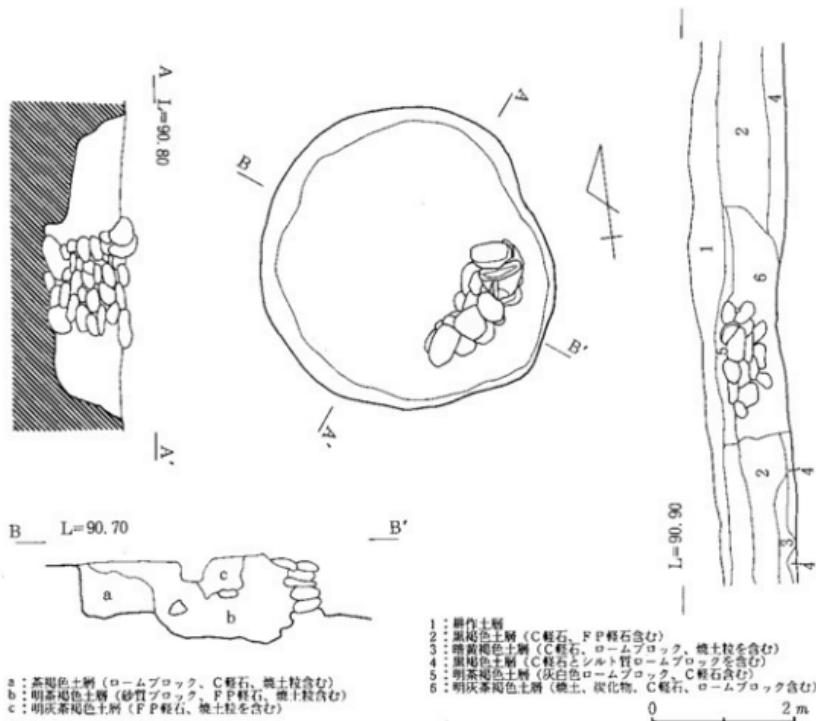
堅穴式石櫛をもつ墳墓のことである。墳丘をもたないことから、堅穴式古墳とは区別している。B区ほぼ中央部に位置し、上部は後世の耕作により削平されている。構築当時の地表面ははっきりしないが、掘り方は、現状で耕作土層直下のC軽石、FP軽石を含む比較的しまりのある黒褐色土層



第29図 石櫛墓出土遺物

第14表 石櫛墓 土 器 観 察 表

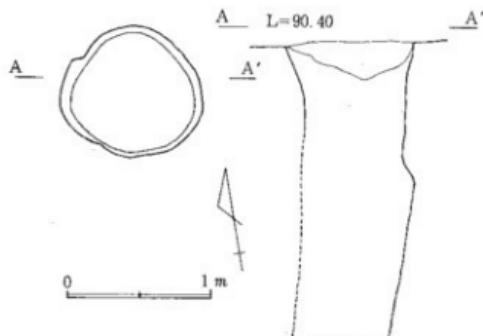
遺物番号	器 種	法量 (cm)	技 法 等	胎 土	備 考
拂 図 版 52	土 師 器 环	口径 12.8 残高 2.7	口縁部 橫ナデ、体部 ヘラ削り 体内部 ナデ	砂・輝石 含有	色調 焼成 良好
拂 図 版 53	土 師 器 环	口径 10.0 残高 2.1	口縁部 橫ナデ、体部 ヘラ削り 体内部 ナデ	多量の砂・輝石 含有	色調 焼成 良好
拂 図 版 54	土 師 器 环	口径 17.6 残高 5.6	口縁部 橫ナデ、底部 ヘラ削り 体内部 ナデ	輝石含有	色調 焼成 良好



第30図 石榔墓実測図

(3) 井戸跡

B区北東部に位置する。平面は円形、断面は下半部がU字形で、上半部がややロート状に近い広がりをみせる。規模は上端径が88cm、下端径が68cm、深さ約2mである。覆土は粘性、しまりともに弱く、直徑0.5~1mmのB軽石を含む黒褐色土層である。遺物の出土はないが、直径24cm前後の砾を8個程確認した。時代は奈良・平安時代のものと思われる。

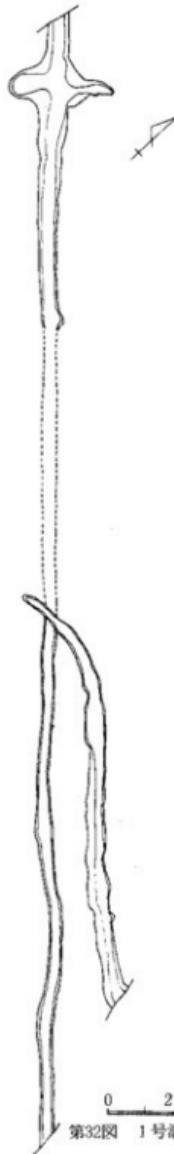


第31図 井戸実測図

第15表 溝一覧表

(4) 溝跡

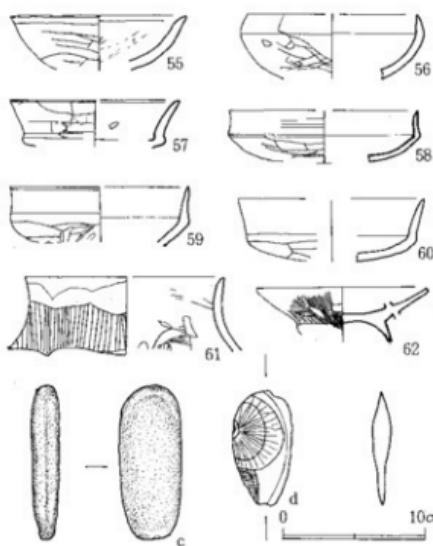
④ 1号溝



第32図 1号溝実測図

番号	規 模	深さ (確認面より)	備 考
1	幅約1m	約0.3m	土器片、たたき石等出土
2	幅約0.8m	約0.24m	近世の陶器片も出土
3	幅約1.1m	約0.23m	
4	幅約1.4m	約1.1m	土器片と礫が多量に出土
5	幅約1.2m	約0.68m	
6	幅約12.8m(推)	約3.2m	覆土の底からまこも、水草検出
7	幅約0.8m	約0.14m	
8	幅約0.6m	約0.4m	覆土にFA軽石を含む
9	幅約8m(推)	約2.4m(推)	
10	幅約7.6m(推)	約2m(推)	

本溝はA区、C区を貫き、方位はN-58°-Wをとる。溝はしまりのある黄褐色土層を掘り込み、幅約1m、深さ約30cmの規模である。中央部は後世の削平がひどく、確認できなかった。北西部端には、溝の両脇に半楕円形状に約2mの突出部分が検出された。これは田に水を取り入れるための、水口ではないかと考えられる。覆土は、上部でFA軽石を混入する褐色砂質土層を、下部では小砂利を含む



第33図 1号溝出土遺物

暗茶褐色砂質土層を確認した。遺物については台付壺、壺、石斧等を検出した。また本溝は、2号住居、3号住居、2号溝、14号住居、15号住居、16号住居と重複。

第16表 1号溝 土器観察表

遺物番号	器種	法径(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
補図 図版 55	土器 壺	口径 12.2 残高 3.7	口縁部 橫ナデ、体部 ヘラ削り 体内部 ナデ	輝石・石英・ 小礫含有	色調 赤茶褐色 焼成 良好
補図 図版 56	土器 壺	口径 11.8 器高 4.7	口縁部 橫ナデ、底部 ヘラ削り 部分的に指圧調整	砂・輝石を少 量含有	色調 肌色を帯びた褐 色、焼成 良好
補図 図版 57	土器 壺	口径 11.6 残高 3.2	口縁部 橫ナデ、底部 ヘラ削り 体内部 ナデ	輝石・砂含有	色調 褐色 焼成 良好
補図 図版 58	土器 壺	口径 13.1 残高 3.6	口縁部 橫ナデ、体部から底部に かけてヘラ削り	輝石・砂を少量 含有	色調 黒褐色 焼成 良好、スス付着
補図 図版 59	土器 壺	口径 11.2 残高 3.8	口縁部 橫ナデ、底部 ヘラ削り 体内部 ナデ	石英・礫含有	色調 黄褐色 焼成 良好
補図 図版 60	土器 壺	口径 13.0 残高 4.2	口縁部 橫ナデ、部分的に指圧痕 有り、底部 ヘラ削り整形	砂・石英含有	色調 茶褐色 焼成 良好
補図 図版 61	土器 壺	口径 13.8 残高 5.2	口縁部 ナデ、体部 ハケメ後研 磨、体内部 ナデ	石英・礫粒含 有	色調 茶褐色 焼成 良好
補図 図版 62	土器 台付 壺	口径 11.6 底径 6.2 器高 3.7	体部・脚部 ハケメ、部分的に指 圧痕有り、体内部 ナデ	砂・輝石含有	色調 茶褐色 焼成 良好

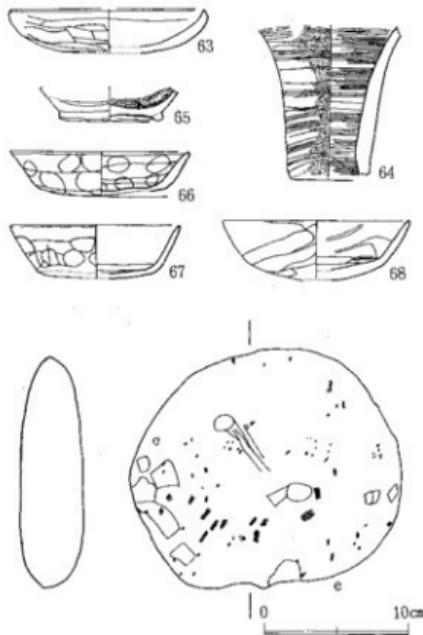
(6) 4、5、6号溝

4、5、6号溝はB区南端に位置する。

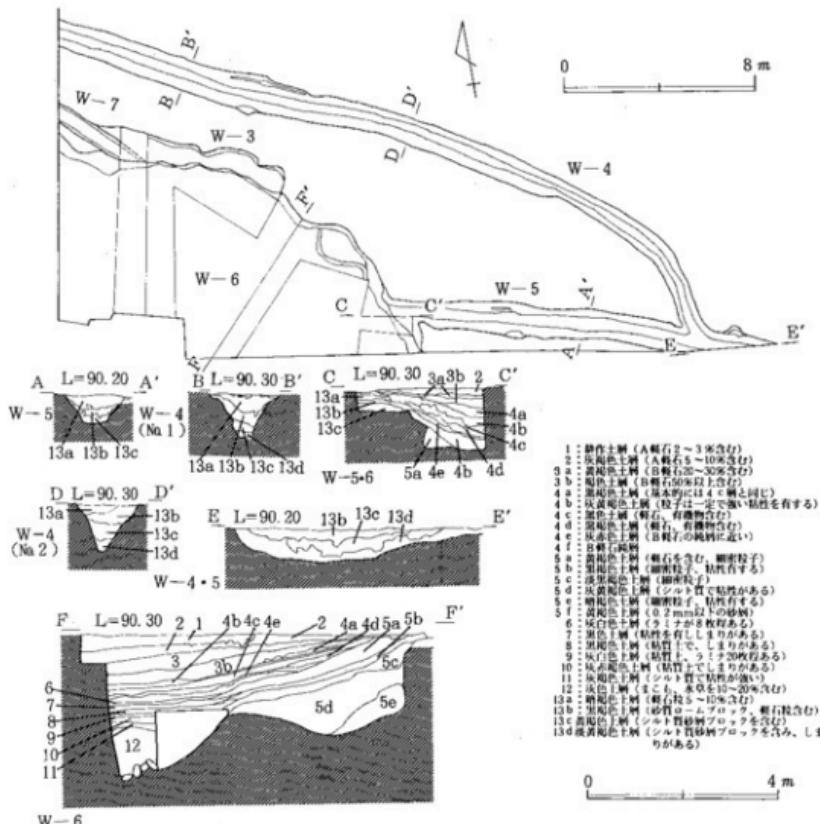
4号溝は、N-76°-W方向を走り、幅約1.4m、深さ約1.1mの規模である。覆土は上部がB軽石を20~30%含む黄褐色土層で、下部が粘性を有する褐色砂質土層である。遺物については、土器片と直径20cm前後の礫が多量に出土した。本溝はB区南東隅で5号溝と重複し、先後関係は後である。

5号溝は、N-89°-W方向を走り、幅約1.2m、深さ約68cmの規模である。覆土は、砂質ロームブロックを含んだ褐色土層である。本溝は4号溝の他に、15号落ち込み、6号溝と重複する。先後関係は古い順に15号落ち込み、5号溝、4号溝、6号溝である。

6号溝は、一部分しか検出できず不明のため一応溝と呼称してはいるが、覆土の底からまごと水草等が検出されたため、沼地であったのではないかとも考えられる。



第34図 4、5、6号溝出土遺物

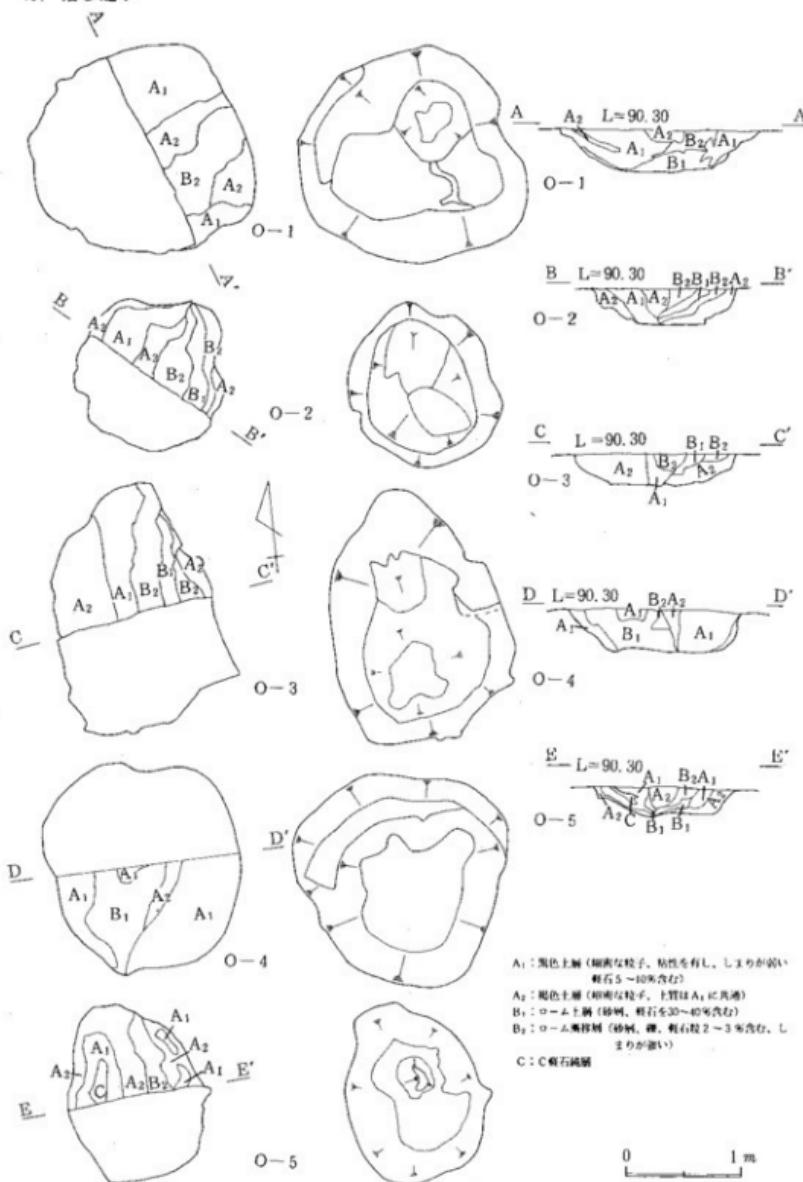


第35図 4、5、6号溝実測図

第17表 4、5、6号溝 土 器 観 察 表

遺物番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考	溝
捕図 図版 63	土師器 環	口径 13.4 底径 5.0 高さ 3.1	体内部から口縁にかけてナデ、体部 ヘラ削り	礫・砂・輝石・ 石英含有	色調 赤褐色 焼成 良好	W-6 出土
捕図 図版 64	須恵器 瓶	残高 10.7	体部 回転ヘラ削り、薄く施釉	石英・雲母・ 石英含有	色調 黑灰色 焼成 良好	W-4 出土
捕図 図版 65	土師器 台付瓶	底径 7.3 高さ 2.4	体部及び体内部 横ナデ、底部 糸切り	長石・輝石・ 石英・雲母・ 砂含有	色調 暗褐色 焼成 良好 スス付着	W-4 出土
捕図 図版 66	土師器 环	口径 12.4 底径 5.0 高さ 3.0	体内部から体外部にかけての口縁部分 橋ナデ、体内部 ヘラ削り一部指圧痕あり、底部 ヘラ削り	礫・砂・輝石・ 石英含有	色調 赤褐色 焼成 良好	W-5 出土
捕図 図版 67	土師器 环	口径 11.5 底径 8.0 高さ 3.7	口縁部及び体内部 ナデ、体部 指圧痕、底部 ヘラ削り	輝石・石英・ 雲母・礫含有	色調 暗褐色 焼成 良好 スス付着	W-4 出土
捕図 図版 68	土師器 环	口径 12.8 底径 8.0 高さ 4.1	体部 ナデ、底部 ナデ	石英・雲母・ 砂粒・輝石含有	色調 赤褐色 焼成 良好	W-4 度

(5) 落ち込み



第36図 1～5号落ち込み実測図



第37図 1号落ち込み出土遺物

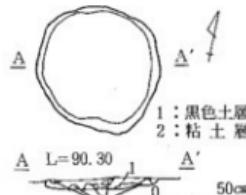
第38表 落ち込み一覧表

番号	形 状		規 模	深さ(底 面より)	備 考
	平 面	断 面			
1	円 形	半椭円形	直 径約 3.6 m	約 0.72m	覆土より土師質の土器片(环)が出土
2	円 形	半椭円形	直 径約 2.5 m	約 0.76m	
3	椭 圆 形	半椭円形	長直径約 4.2 m 短直径約 2.8 m	約 1 m	
4	円 形	逆 台 形	直 径約 3.2 m	約 0.72m	8号住居と重複
5	椭 圆 形	半椭円形	長直径約 3.2 m 短直径約 2.4 m	約 0.52m	
6	円 形	半椭円形	直 径約 2.8 m	約 0.4 m	一部分が調査区域外
7	円 形	半椭円形	直 径約 2.8 m	約 0.68m	一部分が調査区域外
8	円 形	半椭円形	直 径約 3 m	約 1.4 m	一部分が調査区域外
9	円 形	半椭円形	直 径約 1.4 m	約 0.64m	
10	円 形	逆 台 形	直 径約 2.6 m	約 0.8 m	井戸と重複
11	円 形	半椭円形	直 径約 2.4 m	約 0.68m	12号落ち込みと重複
12	円 形	半椭円形	直 径約 2.1 m	約 0.52m	11、13号落ち込みと重複
13	円 形	半椭円形	直 径約 1.8 m	約 0.48m	12号落ち込みと重複
14	椭 圆 形	半椭円形	長直径約 3.4 m 短直径約 2 m	約 0.27m	
15	椭 圆 形	半椭円形	長直径約 2 m 短直径約 1 m	約 0.56m	5号溝と重複し南半分を切られる
16	円 形	半椭円形	直 径約 2 m	約 0.16m	
17	円 形	半椭円形	直 径約 3 m	約 0.4 m	

落ち込みが全部で17個検出された。区ごとに落ち込みの数をみると、A区12個、B区2個、C区3個となっており、A区に集中している。平面は円形か梢円形、断面は半梢円形か逆台形である。規模は大きいもので直径約4.2m、深さ約1m、小さいもので直径約2m、深さ約16cmである。覆土についてみると、覆土の一部分が逆転している。つまり上部の黒褐色土層と下部(地山も含む)のローム・砂小礫を含む黄褐色土層が入れかわっている。上記の規模、形状、覆土等から考察すると、これらの落ち込みは木の倒れた跡(風倒木痕)であると考えられる。遺物については、A区中央東寄りの1号落ち込みから、土師質の残存50%程の環が出土している。

(6) 土 壤

A区中央部に位置し、削平のため上部はほとんど残存しない状態で検出された。形状は円形で、規模は直径約80cm、深さ約8cmを測る。覆土は粘土を含むしまりの弱い黒色土層である。遺物は出土していないが、2号住居と重複し、2号住居南端の床面と壁を切っている。時代的には古墳時代中期のものと考えられる。



第38図 土壤実測図

(7) グリット・表採遺物

C区南東部から須恵質の環が出土。

技法は口縁部横なで、体部回転ヘラ削り、底部回転糸切り調整である。

4号住居東寄りから土師質の環が出土。C区東側より石匙、円盤形土製品が出土。円盤形土製品の用途については不明である。



第39図 グリット・表採遺物

III まとめ

本調査対象地区は、土器片が確認されるのみの桑畠と畑であった。しかし今回の発掘調査によつて、本遺跡地は古墳時代、奈良・平安時代における遺構、遺物を有する複合遺跡であることがわかり、下記のような成果を収めることができた。

1 住居跡については、古墳時代の竪穴式住居が5軒、奈良・平安時代の竪穴式住居が12軒、合計17軒が確認された。その結果、各時期の住居の作りや生活用具等、当時の人々の生活の様式を知る上で貴重な資料を得ることができた。そこで、判明した特色、傾向を列記すると次の通りである。

古墳時代の竪穴式住居では、①時期は石田川期。②形状、規模は7号住居を除き、ほぼ1辺を6mとする隅丸方形。③炉跡は1、2号住居に確認され、中央部やや西寄りに設置。④貯藏穴は2、6号住居に確認され、2号住居南西隅、6号住居南東隅に設置。⑤柱穴は7号住居を除きすべてに4個確認。⑥遺物は体部に刷毛目文をともなう台付甕、壺等を検出。

奈良・平安時代の竪穴式住居では、①時期は国分期。②形状は長方形。③長辺と短辺との比は1.1~1.6で、特に1.1が多い。④面積は約6~14m²が一般的。⑤長軸方向はN-58°-EからN-89°-Eに集中。⑥かまどは東壁やや南寄りに付設し、壁外袖無し。⑦貯藏穴は3、14、15号住居南東隅に確認。⑧柱穴は未確認。⑨遺物は土師質、須恵質の壺、甕、器台、枕等を検出。

2 石櫛墓がB区中央から1基検出された。この石櫛墓は、周辺の古墳群との関連を考え合わせると、信仰形態を解明する上で貴重な資料になるものと思われる。石櫛墓としては形が小さく、再葬墓か、幼児墓とも考えられる一方、東側に隣接する八幡山古墳の陪塚的存在も考えられる。出土品は、すでに盗掘されているため確認できなかった。櫛築時期は、FP軽石の包含層と石田川期の5号住居を掘り抜いて作られていることから、7世紀後期から8世紀後期にかけてのものと思われる。

3 溝跡10、井戸跡1、土壙1が検出された。これらは、いずれも当時の人々の生活と生産との関連を考える上で、貴重な資料になるものと思われる。溝についてみてみると、本遺跡地の南北西方向に隣接して古代国家条里制地割の跡が認められることから、それらの水田に水を取り入れるために灌漑用水ではなかったかとも考えられる。また6号溝では、覆土の底からまこもとみられるいね科の多年草と水草が検出され、農業用水として利用された溜池の可能性も考えられる。一方2、4号溝においては、陳と共に多量の土器片、石器等が確認されたことから、灌漑用水以外にも、特に人々の日常生活と深い結びつきをもっていたものと思われる。

4 落ち込みが17件検出された。これらの落ち込みは、形状、規模、覆土の状態等から風倒木痕と考えられ、この調査地周辺の当時の自然環境を知る上で貴重な資料となるものと思われる。

最後に、本調査地周辺には「倭名類棄沙」等の文献と古墳群から、上毛野君の一族で勢力をもった豪族である「朝倉君」の存在が早くから知られていたが、当時的一般の人々のことについては、未知の状態であった。しかし今回の発掘調査により、人々の生活の一端を知ることができ、調査は大変意義深いものとなった。なお、遺跡の位置と環境の詳細については、後閑遺跡を参照されたい。

圖版 1



調査区全 景



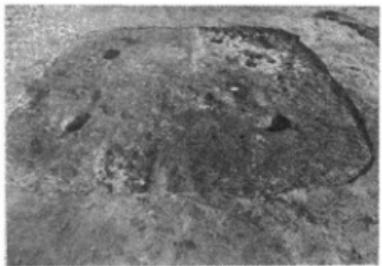
A 区 全 景



B 区 全 景



C 区 全 景



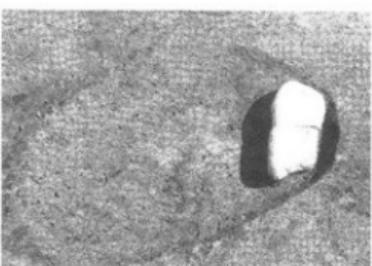
1号住居跡



1号住居跡 炉



2号住居跡

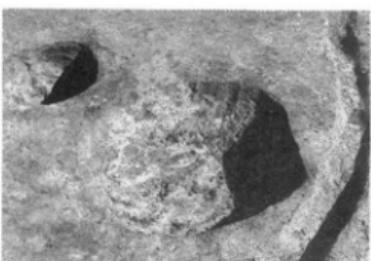


2号住居跡 炉

图 版 2



2号住居跡 遺物出土状況



2号住居跡 貯藏穴



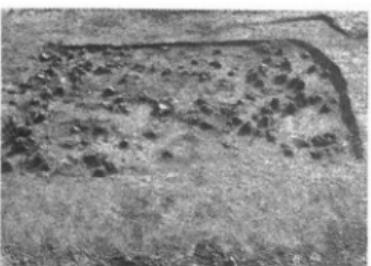
3号住居跡



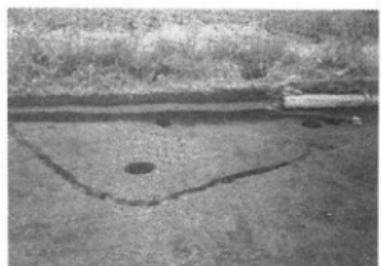
3号住居跡 かまど遺物出土状況



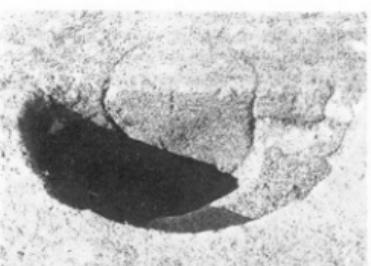
4・6号住居跡



4号住居跡 遺物出土状況



7号住居跡



7号住居跡 柱穴

図版 3



9・10号住居跡



9号住居跡 遺物出土状況



11号住居跡



13号住居跡 かまど



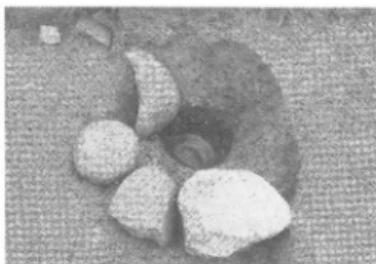
15号住居跡



15号住居跡 遺物出土状況

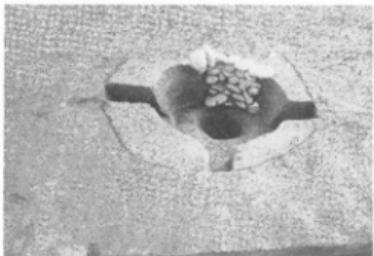


15号住居跡 かまど



15号住居跡 貯藏穴

図版 4



石 横 墓 (上から)



石 横 墓 (横から)



井 戸 跡



1・2号溝跡

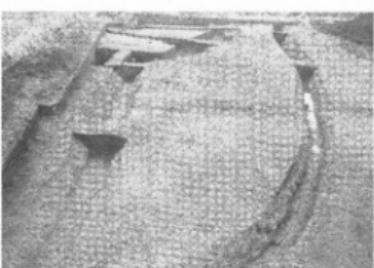


4 号 溝 蹤



4号溝遺物出土状況

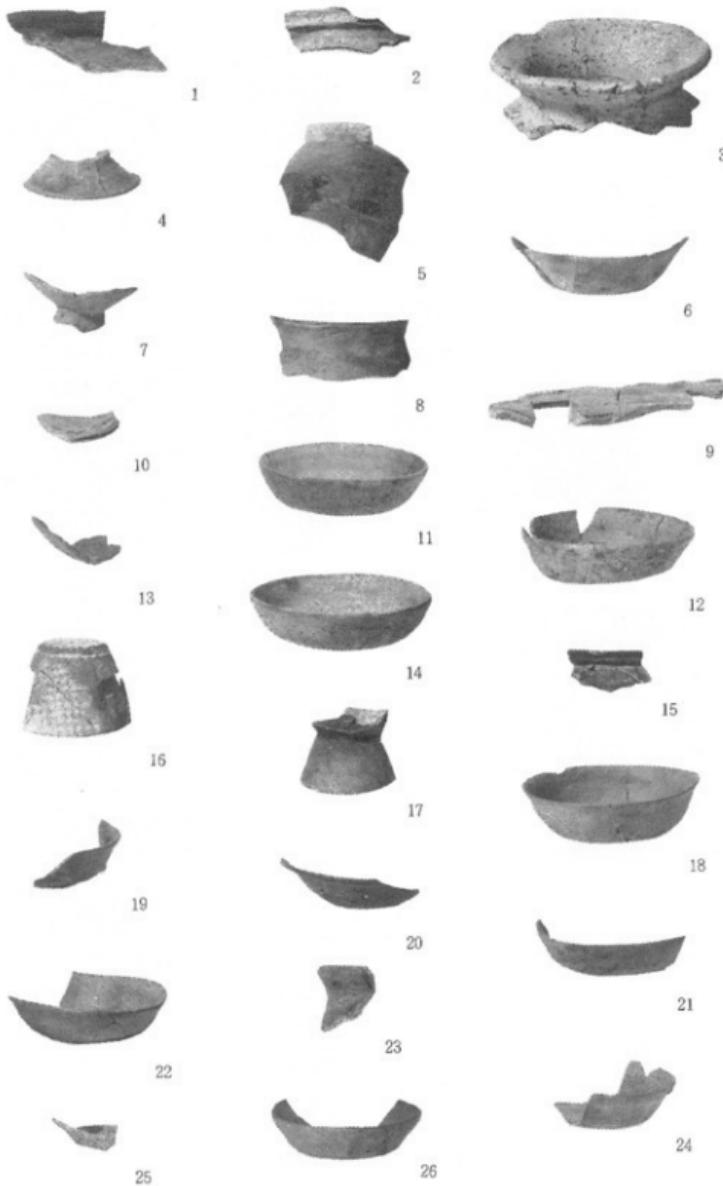
2号落ち込み



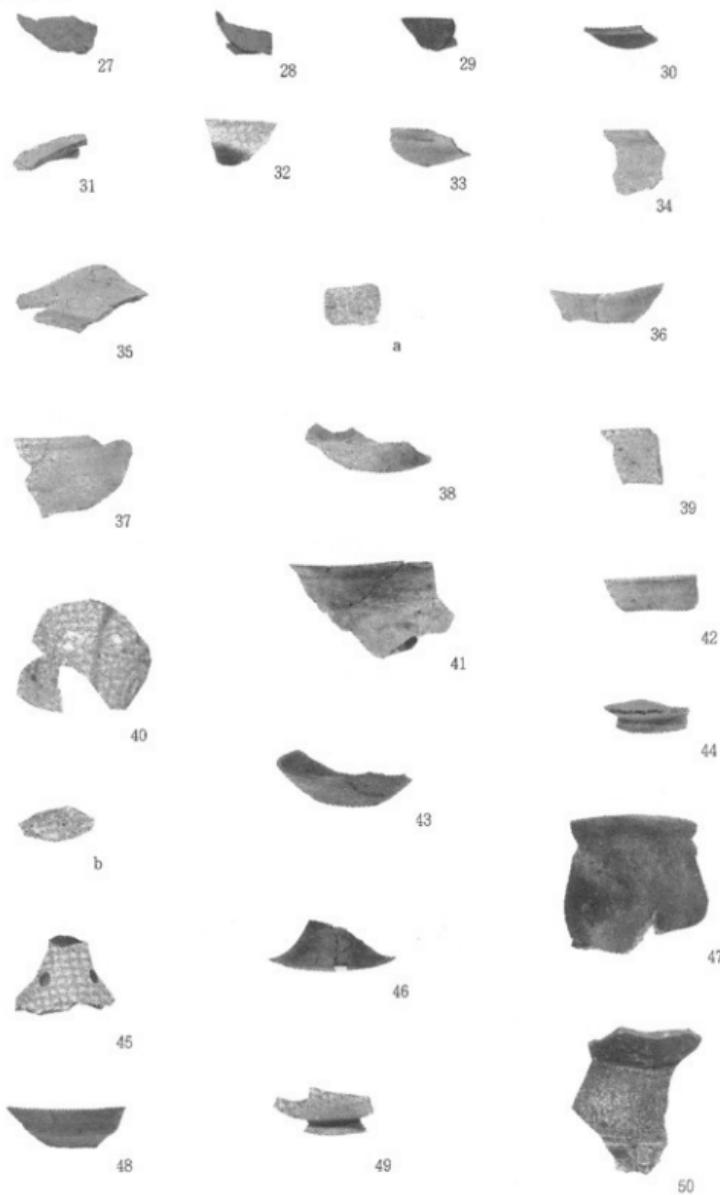
4・5・6号 溝跡



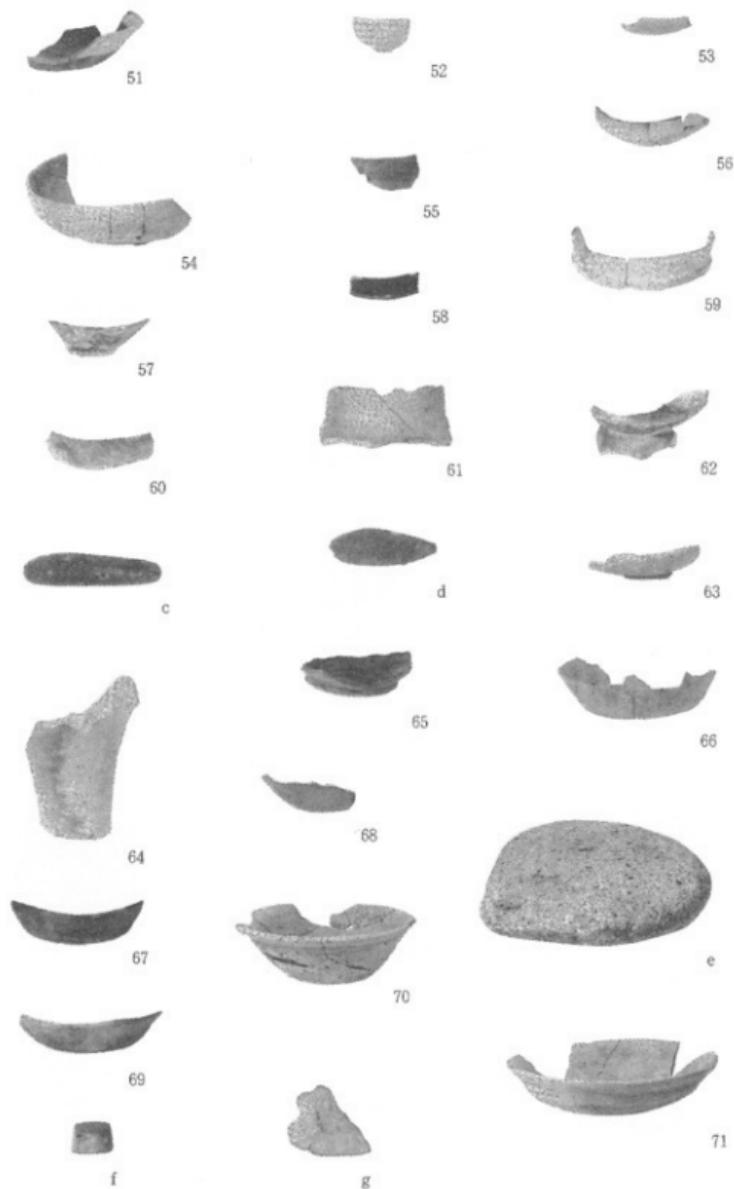
図版 5



図版 6



図版 7



後 関 團 地 遺 跡

昭和 58 年 3 月 31 日 印刷

昭和 58 年 3 月 31 日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市大手町二丁目12-1

印刷 有限会社 原田印刷所
前橋市大手町三丁目 6-10

